

## 弘大と元木商店(青森)タッグ

# 食用バツタ 大量養殖研究

## 食料危機対策、特産品化も

食用バツタの研究を進めている弘前大学農学生命科学部・管原亮平助教の研究グループと製菓製パン原料卸売業の元木商店(青森市)は2日、トノサマバツタの大量養殖に向けた共同研究を開始すると発表した。食料危機や環境問題の解決策の一つである昆虫食に着目し、本県の新たな特産品を目指す。

(赤田和俊)



弘大と元木商店が養殖研究を進めるトノサマバツタ。弘前大の管原助教研究室

食用昆虫は、畜産に比べて狭い土地と少ない餌で大

管原亮平助教

量に養殖でき、ゲップなどの温暖化ガスを出さないことから、環境に優しいタンパク源として世界各国で養殖の事業化が進められている。

トノサマバツタは産卵から約1カ月半で成虫に育つ。イネ科の雑草や牧草で飼育できるため、本県農業との親和性が高いという。味はうまみが強く、油で揚げるとエビに似た味わい。必須脂肪酸αリノレン酸

を豊富に含んでいる。共同研究では、元木商店がケージ内でトノサマバツ

タを養殖し、弘大側が技術指導。効率的に大量生産できる方法を確立し、年4万4千匹の生産を目指す。野草が育たない冬の餌用に、乾燥した草を使った人工飼料も開発。東京の昆虫食専門企業「TAKEO」(齋藤健生代表)の助言を受け、加工食品の開発にも取り組む。研究は2年間、21あおも

り産業総合支援センターの先端技術事業化補助金を受けける。元木商店の元木桂吾社長は取材に「昆虫食は、大手コンビニエンスストアが商品販売するなど注目度が高く、将来性を感じている」、管原助教は「世界的な食料危機や環境問題の解決方法を、本県から発信したい」と語った。

上記の画像は、当該ページに限って”東奥日報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。